

きょうだい構成とヤマアラシのジレンマ

—心理的接近・回避における葛藤との関連—

松田 幸久 平田 萌

要旨

きょうだい構成とヤマアラシのジレンマの間に関連があるか否かについて、出生順位とヤマアラシのジレンマの関連、回答者の性別および性別の同一性とヤマアラシのジレンマの関連、きょうだいの人数とヤマアラシのジレンマの関連について検討した。藤井(2001)による山アラシ・ジレンマのパターン尺度を用いてヤマアラシのジレンマを定量化した。本研究によって、女性は「傷つき」よりも「寂しさ」という心理状況に敏感であり、それを意識する状況を優先して回避しようとすることで強いジレンマを感じる傾向にあることが示された。この傾向は性別が同一であるきょうだいにおいても同様であった。また、3人きょうだいにおいて「寂しさ」を敏感に感じ、その事態を回避しようとするためにジレンマを感じるという傾向が示された。

キーワード：きょうだい構成、ヤマアラシのジレンマ、出生順位、性差

1 背景と目的

1.1 きょうだい構成と性格

日常生活において「あの子はしっかり者だ。やっぱり長男だからね」、「うちの子は末っ子だからマイペースだ」などといった会話を耳にする。これはきょうだい構成¹⁾と性格を関連付けた考えである。長男長女がおっとりとした性格である様をさして総領の甚六という故事があるように、日本社会において古くから着目され、受け入れられている考えである。近年では、きょうだい構成と性格についての研究である金山・篠山(1997)の報告の冒頭において“ここ数年来、“non-no”等の女性向けの雑誌や著書において、出生順位と性格とが関連しているという記事や文章をよく目にする”と紹介されている。さらに遡ると1986年の出版物で「兄弟姉妹人間学—人間の出生順位で決まる」(下山・日本放送協会, 1986)という書籍が発売されている。この関連付けとその人気は今日でも変わらず、例えばweb上において“下の子には

甘え上手が多く、溺愛してしまう”といった記載をみることができる。

きょうだい構成と性格の関連については、これまで実証的な研究が数多くなされてきた。白佐(1993)の文献調査によると1980年～1990年代を中心として33報が記録されている。現時点で学術情報データベース・サービスであるCiNii Researchで“きょうだい構成”というキーワードで検索すると“すべて”の項目で67件、論文の項目で58件が検出されることから、現代においてもきょうだい構成と性格の間の科学的知見の蓄積がなされているといえよう。先行研究では、2人きょうだいにおける長子は自制的、控えめ、仕事が丁寧、会話の聞き手、面倒を嫌う、といった特徴があり、末子は甘ったれ、親に告げ口をする、おしゃべり、やきもちやき、強情、活動的、といった特徴があることが示されている(三木・木村, 1954; 依田・深津, 1963; 依田・飯島, 1981)。これに続いて浜崎・依田(1985)は3人きょうだいを対象とした検討を行っており、長子

と末子は2人きょうだいで見られた特徴と同様であること、中間子においては面倒くさがらずに仕事に取り組むがよく考えないので失敗も多い、気に入らないと黙り込む、という特徴を見出している。ただし、中間子の特徴については長子や末子に比べるとあまりはっきりしたものではないとしている(レビューとして、白佐, 1995; 金山・笹山, 1997)。

1.2 ヤマアラシのジレンマ

"ヤマアラシのジレンマ"²⁾はコミュニケーションにおける心理的な接近と回避の間の葛藤(ジレンマ)を表す言葉であり、生物は生きるために連れそって相手が必要とするものの、接近するがゆえに互いを傷つけてしまう事態を恐れて接近する事を回避するという葛藤を意味する。ヤマアラシのジレンマをまとめた先行調査によると、ショーペンハウアー(Schopenhauer, A)による次のような寓話をもとに生まれた言葉である(岡山県立図書館, 2019; 藤井, 2001; 山崎, 2021)。その寓話は"ある冬の寒い日の二匹のヤマアラシが暖をとろうと身を寄せ合ったが、トゲだらけのためお互いの体を傷つけあってしまう。そのため離れてみるとまた寒くて耐えられない。何度も近づいたり離れたりしながら、互いを傷つけることなく暖をとれる適度な距離を見つけ出す"というものであった。これをもとにフロイト(Freud, S)は1921年の著書の中でヤマアラシのジレンマを"心理的距離が近くなるほどにつる愛と憎しみ"といった相反する感情の葛藤としている。その後、精神分析医のベラック(Bellak, L)が1974年に、青年が友人との関係において"近づきたいが離れたい"といったように適度な心理的距離を模索して抱く葛藤を指す言葉としてヤマアラシのジレンマを用いている。

以上は古典的なヤマアラシのジレンマの概念であるが、適度な心理的距離といった際の適さについては時代や文化によって大きく変化する。今日の日本における、いわば現代版ヤマアラシのジレンマにおいては藤井(2001)による定義が広く認められている。藤井(2021)はインタビュー調査を元にして、ヤマアラシのジレンマは「近づきたいー近づきすぎ

たくない(近づきたいが近づきすぎたくない)³⁾、「離れたいー離れすぎたくない(離れたいが離れすぎたくない)という2種類が存在するとした。古典的なヤマアラシのジレンマでは、相手に近づきたいという欲求を持つと同時に離れたいという欲求が存在するというものであり、両欲求は反対に位置する欲求として捉えられていたといえる。それに対して、藤井(2001)は近づくと欲求と離れるという欲求を独立したものとしてみなし、かつ、"〇〇し過ぎない"というように適度さを求めるジレンマであるとしている⁴⁾。

1.3 本研究の目的

本研究ではきょうだい構成とヤマアラシのジレンマの間に関連があるか否かについて、次の3つの観点から検討を行う。

第1の観点は出生順位とヤマアラシのジレンマの関連についてである。長子には自制的、控えめという傾向があり、末っ子にはわがまま、やきもちやきという傾向がある(三木・木村, 1954; 浜崎・依田, 1985)。よって、長子がより強くヤマアラシのジレンマを感じると仮定できる。

第2の観点は回答者の性別および性別の同一性とヤマアラシのジレンマとの関連である。特に、姉、兄、自身というように、きょうだい構成において異なる性別が混在している場合、生育過程において年齢の近い異性が存在することになり、普段の心理的接近・回避において多くのバリエーションを経験することになる。一方、きょうだい構成が同性である場合は、その性別の人との心理的距離の取り方に習熟すると考えられる。よって、きょうだい構成が全員男性である、全員女性であるなどして、性別が同一である場合と混在している場合とでヤマアラシのジレンマのあり方も異なると仮定できる。

第3の観点はきょうだいの人数とヤマアラシのジレンマの関連についてである。日常生活、主に家庭内での状況を考えると、きょうだい構成が2人である場合はきょうだい関係の相手が決定してしまう。一方で、3人以上である場合はきょうだい関係の相手が複数人いることから、さまざまな人間関係のあ

り方を体験することができる。これらの違いは他者との心理的接近・回避への考え方に影響すると推測できるため、きょうだいの人数によってヤマアラシのジレンマのありかたも異なると仮定できる。

2 方法

2.1 調査参加者

調査参加者は矯正を含む正常な視力を有する大学生90名（男性52名、女性38名）であった。平均年齢は20.25歳、年齢の標準偏差は0.82であった。

2.2 手続き

大学の講義後に質問紙を用いて調査を実施した。調査用紙は調査の目的や同意の意思を示す署名欄が記載されたフェイスシートと36項目からなる山アラシ・ジレンマのパターン尺度で構成されていた⁵⁾。調査用紙は参加者に一斉に配布され、本調査についての説明と倫理的配慮の解説があった後に回答を開始した。回答時間に時間制限は設けず、自由に時間をかけてよいことを教示した。調査用紙は講義室前方に設置した回答提出箱に提出を求めた。時間や場所を変えて回答したいという希望に備え、持ち帰るなどして回答しても良く、その場合は別の場所に設置した回答提出箱に提出するよう教示した。なお、回答せずに講義室から退室した場合に回答しない個人が特定される恐れがあった。この事態を防ぐため、回答に賛成しないなどの理由によって1項目も回答していない場合であっても調査用紙を提出箱に提出してもよいことを教示した。

2.2.1 フェイスシート

年齢、性別、きょうだい数、兄弟姉妹それぞれの人数を記載する欄を設けた。

2.2.2 山アラシ・ジレンマのパターン尺度

青年が友人関係において抱く山アラシ・ジレンマのあり方を測定する尺度である。心理面において他者と「近づきたいー近づきすぎたくない」ジレンマを測定する尺度と、「離れたたいー離れすぎたくない」

ジレンマを測定する尺度の2種類、4因子から構成されている。回答は「まったく感じない」を1点、「非常に良く感じる」を5点とする5件法である。

「近づきたいー近づきすぎたくない」ジレンマにおいては、相手に近づき親しい関係でいたいとは思いますが、そのことで自分が相手から傷つけられることは回避したいという回避欲求を表す「近づきたいー自分が傷つくことの回避」(APP1)と、相手に近づきたいとは思いますが、そのことで自分が相手を傷つけることは回避したいという回避欲求を示す「近づきたいー相手を傷つけることの回避」(APP2)の2因子から構成されている。

「離れたたいー離れすぎたくない」ジレンマにおいては、相手から少し離れたたいとは思いますが、そのことで自分が嫌われたり寂しい思いをしたりすることは避けたいという回避欲求を示す「離れたたいー自分が寂しい思いをすることの回避」(LEA1)と、相手から少し離れたたいとは思いますが、そのことで相手に寂しい思いをさせることは避けたいという回避欲求を示す「離れたたいー相手に寂しい思いをさせることの回避」(LEA2)の2因子から構成されている。質問項目数はAPP1が11項目、APP2が8項目、LEA1が9項目、LEA2が8項目、計36項目である。

実施に際し、心理測定尺度集V（堀・吉田・宮本、2011）収録の山アラシ・ジレンマのパターン尺度において“項目の配列順はランダムに並べ替える方がよい。”との指摘がなされているが、本研究ではAPP1などの4つの因子ごとにまとめて質問項目を並べた。また、本尺度はAPP1と2の実施前に条件的質問を課し、それに対する回答に応じてAPP1と2を実施するというような2段階の実施様式である。これはLEA1と2に対しても同様である。本研究では1段階目の質問を実施せず全項目を参加者に課すこととした。この変更に伴い教示文は「あなたの普段の考え方についてお聞きます。次の質問事項に対して、自分の考え方と当てはまるところにチェックを入れてください。」というものに変更した。

2.2.3 倫理的配慮

調査実施に先立ち、質問紙に回答を行わなくても

個人の不利益につながらないこと、強制力はないこと、回答者の意思によって途中で回答を中断できること、個人のデータそのものは公表されないことなどが口頭と文書にて伝えられた。フェイスシートに、調査目的の説明、調査倫理にかかわる注意事項、問い合わせ先、同意の意思を示す署名欄を設けており、調査に参加する意思があるものは署名を行った。分析には参加の同意が得られたもののみを使用した。

2.3 分析方法

山アラシ・ジレンマのパターン尺度における4因子はそれぞれに対応する項目の数が異なっている。統計的分析に先立ち、4因子それぞれに回答された評点の平均値を参加者ごとに算出した。すなわち4因子の代表値は平均値とした。

4因子は独立しているものの、APP1とAPP2は自他のいずれかの気持ちが傷つくか否かについての質問項目である。そのためAPP1とAPP2の評点の平均値を心理的傷つき回避度と定義した。これはLEA1とLEA2でも同様であり、両者は自他の区別があるものの寂しい思いをするか否かについての質問項目であったため、両者の平均値を寂しさ回避度として定義した。

APP1とLEA1は自分を対象とした傷つきと寂しい思いに対する回避であることから藤井（2001）は対自的要因とよんでいるが、ここでは両者の評点の平均点を対自的回避度として定義した。最後にAPP2とLEA2は“相手”を対象とした傷つきと寂しい思いに対する回避であり、藤井（2001）は対他的要因とよんでいるが、ここでは両者の評点の平均点を対他的回避度として定義した。これらの因子を合成した4つの評点も分析に対象とした。

きょうだい構成や性差を基として参加者を複数の群に分け、それぞれがもつAPP1などの4因子の評点と4つの合成評点を t 検定および分散分析にて比較した。分散分析は評点別に分けて実施した。

3 結果

3.1 データ除外と分析対象

記入漏れや回答に不備があったものを除いた89名（男性51名、女性38名）を分析対象とした。

3.2 第1の観点：出生順とジレンマ評点

出生順とジレンマ評点の関係について検討した。出生順を基として群分けしたところ、長子群が34名、末子群が35名、一人っ子群が6名、その他が14名となった。一人っ子とその他に分類されたデータ数が少ないため、本分析では長子群と末子群を比較することとした。分析には対応のない t 検定を用いた。

4因子それぞれの評点と4つの合成評点の計8種類のジレンマ評点において対応のない t 検定を行ったところ、どの評点の分析においても有意差はみられなかった。

3.3 第2の観点：回答者の性別と性別の同一性とジレンマ評点

自分を含めて兄弟姉妹が2人以上いる回答者のデータを用いて、自己の性別およびきょうだい構成内の性別の同一性とジレンマ評点の関係について検討した。データは、男性のみで構成されている群（男性・同一群）、女性のみで構成されている群（女性・同一群）、回答者が男性でありその他が女性である群（男性・混合群）、回答者が女性でありその他が男性である群（女性・混合群）の4群に分類され、それぞれ順に18名、14名、18名、15名であった。

ジレンマ評点を用いて回答者の性別（男性群 vs. 女性群）と性別の同一性（同一群 vs. 混合群）からなる 2×2 の4水準2要因の分散分析を行なった。2要因とも被験者間要因であった。

APP2評点の分析において、有意な性別の主効果がみられ、女性群が男性群に対して高い評点を示した（4.22 vs. 3.95; $F(1, 61) = 9.89, p < .05$ ）。性別の同一性要因および交互作用は有意ではなかった。

LEA2評点の分析において、有意な性別の主効果がみられ、女性群が男性群に対して高い評点を示した（3.94 vs. 3.51; $F(1, 61) = 12.82, p < .05$ ）。有

表 1. 観点別の分析結果.

	N	素因子の評点				合成評点			
		APP1	APP2	LEA1	LEA2	心理的 傷つき	寂しさ	対自的	対他的
出生順位 (観点 1)									
長子	34	3.24	4.11	3.27	3.85	3.67	3.56	3.25	3.98
末子	35	3.41	4.16	3.39	3.78	3.79	3.58	3.40	3.97
差分		-0.18	-0.05	-0.12	0.07	-0.11	-0.02	-0.15	0.01
性別 (観点 2)									
男性	36	3.24	3.95	3.05	3.51	3.59	3.28	3.14	3.73
女性	29	3.23	4.22	3.40	3.94	3.73	3.67	3.32	4.08
差分		0.01	-0.27	-0.36	-0.43	-0.13	-0.39	-0.17	-0.35
性別の同一性									
同一	32	3.23	4.32	3.41	4.06	3.78	3.73	3.32	4.19
混合	33	3.24	3.83	3.01	3.34	3.54	3.18	3.12	3.59
差分		-0.01	0.49	0.40	0.72	0.24	0.56	0.19	0.60
性別×同一性									
男性・同一	18	3.26	4.26	3.37	3.89	3.76	3.63	3.31	4.07
男性・混合	18	3.22	3.65	2.72	3.13	3.43	2.92	2.97	3.39
女性・同一	14	3.19	4.40	3.45	4.29	3.80	3.87	3.32	4.34
女性・混合	15	3.26	4.06	3.36	3.61	3.66	3.48	3.31	3.83
人数 (観点 3)									
2人	36	3.31	4.07	3.26	3.59	3.69	3.42	3.28	3.83
3人	41	3.33	4.14	3.39	4.01	3.74	3.70	3.36	4.07
差分		-0.02	-0.07	-0.14	-0.41	-0.05	-0.27	-0.08	-0.24

注) 差分は上段から下段を引くことで算出した。心理的傷つき：心理的傷つき回避度，寂しさ：寂しさ回避度，対自的：対自的回避度，対他的：対他的回避度

意な性別の同一性の主効果がみられ、同一群が混合群に対して高い評点を示した (4.06 vs. 3.34; $F(1, 61) = 4.79, p < .05$). 交互作用は有意ではなかった。

対他的回避度の分析において、有意な性別の主効果がみられ、女性群が男性群に対して高い評点を示した (4.08 vs. 3.73; $F(1, 61) = 14.59, p < .05$). 有意な性別の同一性の主効果がみられ、同一群が混合群に対して高い評点を示した (4.19 vs. 3.59; $F(1, 61) = 5.23, p < .05$). 交互作用は有意ではなかった。

寂しさ回避度の分析において、有意な性別の主効果がみられ、女性群が男性群に対して高い評点を示した (3.67 vs. 3.28; $F(1, 61) = 9.65, p < .05$). 有意な性別の同一性の主効果がみられ、同一群が混合群に対して高い評点を示した (3.73 vs. 3.18; $F(1, 61) = 5.12, p < .05$). 交互作用は有意ではなかった。

3.5 第3の観点：きょうだいの人数とジレンマ評点

自分を含めて兄弟姉妹が2人以上いる参加者のデータを用いて、きょうだいの数とジレンマ評点の関係について検討した。2人群、3人群、4人群に分けられ、それぞれ順に36名、41名、6名であった。4人群に分類されたデータ数が少ないため、本分析では2人群と3人群を比較することとした。分析には対応のないt検定を用いた。

LEA2評点の分析において、3人群が2人群に対して有意に高いという結果が得られた (4.01 vs. 3.59; $p < .05$).

4 考察

4.1 結果のまとめ

本研究はきょうだい構成と心理的接近・回避における葛藤の関係を検討するものであった。研究に先立ち3つの観点を考案し、検討した。

第1の観点は出生順位とヤマアラシのジレンマの関連についてであった。本研究では長子群と末子群との比較を行ったが、4つの因子の評点と4つの合成評点の全てにおいて群間差がみられず、出生順位と心理的接近・回避の間には関連が見出されなかった。よって、長子がより強くヤマアラシのジレンマ

を感じるとの仮説は支持されなかった。

第2の観点は回答者の性別および性別の同一性とヤマアラシのジレンマの関連についてであった。データを、男性か女性か、きょうだいの構成員の性別が同一か混合かの2×2の4群に分け山アラシ・ジレンマ尺度の評点を比較したところ、次のような結果が得られた。APP2, LEA2, 対他的回避度, 寂しさ回避度において女性群が男性群に対して高い評点を示した。また、LEA2, 対他的回避度, 寂しさ回避度において同一群が混合群に対して高い評点を示した。性別と構成員の性別の同一性の要因間において交互作用はみられなかった。

第3の観点はきょうだいの人数とヤマアラシのジレンマの関連についてであった。本研究ではきょうだいの人数が2人群と3人群に分類して比較した。LEA2において3人群が2人群に対して有意に高かった。

4.2 第2の観点について

第2の観点では回答者が女性である場合に高い回避傾向がみられるという結果であった。男性との比較で有意に高かったAPP2は、相手に近づきたいと思うが、そのことで自分が相手を傷つけることは回避したいという回避欲求を示す「相手を傷つけることの回避」傾向である。また、LEA2は、相手から少し離れたいと思うが、そのことで相手に寂しい思いをさせることは避けたいという回避欲求を示す「相手に寂しい思いをさせることの回避」傾向である。この両者は相手を中心とする心理的傾向である。自分が傷ついたり (APP1), 自分が寂しい思いをしたとしても (LEA1), それは二次の問題とし、相手が傷ついたり寂しい思いをしないように考えることを最優先として「近づきすぎたくない」と考えたり「離れすぎたくない」とジレンマを感じる。この傾向は女性の方が強いことが本研究によって明らかになった。なお、対他的回避度はAPP2とLEA2の平均値である。それぞれ単独で男女間で有意差があったことによって、対他的回避度でも男女間の有意差がみられたと解釈できる。

寂しさ回避度においても性差がみられた。寂しさ

を自分が感じたり、相手に感じさせたりすることに対して、女性の方がより強く回避する傾向があることが示された。傷つき回避度においては性差がみられなかったことを考えると、女性は「傷つき」という心理状況よりも「寂しさ」という心理状況に敏感であり、それを意識する状況を優先して回避しようとするためにジレンマを感じる傾向にあることが示された。

きょうだい構成における性別の同一性とヤマアラシのジレンマの関連は、LEA2、対他的回避度、寂しさ回避度においてみられ、いずれも同一群が混合群に対して高いというものであった。同一群においては寂しさという心理状況を避ける傾向があり、かつ、他者を中心に捉えて寂しさを感じさせたくないがゆえにジレンマを感じる傾向が示された。

白佐(1993)はきょうだいの性別構成と性格関連について検討している。矢田部ギルフォード性格検査(以下、YG検査)を用いて性格を類型化し、性別の同一群と混合群における各類型の割合を比較した。結果、きょうだいの性別構成とYG検査の結果の間には関連がなかったと報告している。ヤマアラシのジレンマとYG検査による性格とを同等の性格として捉えることは困難であるが、一般に性格とよんだ場合の行動傾向において、きょうだい構成と関連するものとしなないものがあることを示唆している。

4.3 第3の観点について

第3の観点ではLEA2において3人きょうだいが2人きょうだいよりも強く高いという結果であった。LEA2は相手に寂しい思いをさせないために、自己の欲求としては離れたいが相手の寂しさを考えて離れすぎたくないという事を意味している。寂しさの発生を回避するため、結果的には相手から離れすぎずにそばに居ることを選択する。つまり、一見、人付き合いが良いような行動をとる傾向が3人きょうだいでは強い。生育環境から考えると3人きょうだいであれば2人きょうだいと比べてきょうだいと過ごす時間が長く関係が多様である。この状況は賑やかであり寂しさを感じる時間が相対的に短いのではないかと推測できる。すると寂しさを感じる時間が心

理的に強いイベントとなってしまうため、3人きょうだいにおいて寂しさを敏感に感じ、より強く回避しようとする傾向が構築されたと考えられる。

4.4 本研究の限界と展望

本研究ではきょうだい構成の人数を調査しているが、年齢差については考慮に入れていない。例えば2歳離れた兄がいる場合、その兄は自分と同一世代として育つ。一方で10歳離れた兄がいる場合、その兄は保護者的役割を担う場面が多くなり、自分と同一世代という感覚は低くなるだろう。このようにきょうだい間の年齢差は人間関係における性格特性の構築において大きな意味を持つが、本研究ではその要因を検討できていない。

また、中間子についての分析を行っていない。中間子は多くのバリエーションがあり、本研究ではデータ数が少なかったことから取り扱わなかった。今後、データを増やし、中間子とヤマアラシのジレンマの関係を検討することで、きょうだい構成と性格特性の関連について新たな発見がもたらされることを期待している。

4.5 結論

本研究によって、女性は「傷つき」よりも「寂しさ」という心理状況に敏感であり、それを意識する状況を優先して回避しようとすることで強いジレンマを感じる傾向にあることが示された。この傾向は性別が同一であるきょうだいにおいても同様であった。また、3人きょうだいにおいて「寂しさ」を敏感に感じ、その事態を回避しようするためにジレンマを感じるという傾向が示された。

注記

- 1 本稿では先行研究にならい、兄弟姉妹を“きょうだい”とよぶ。兄弟や姉妹と表記した場合は構成員の性別を必然的に規定してしまうため、兄弟姉妹関係を指す際には“兄弟姉妹”と表記することになる。文字数としては1文字増えるものの、“きょうだい”とひらがなで表記する方が簡易な表記で読字性が良いこともあり“きよ

うだい”を採用した。本稿で“きょうだい”と表記した場合は、性別を規定していないため姉妹もその対象としている。ところで、伝統的に“しまい”ではなく“きょうだい”という表記になっていることについては、単に兄弟姉妹という単語が先にあり、その2文字をとって“きょうだい”としたのだらうと推測している。

- 2 “ヤマアラシのジレンマ”, “ヤマアラシ・ジレンマ”, “山アラシ・ジレンマ”などのバリエーションがある。本項では“ヤマアラシのジレンマ”とした。
- 3 本稿の「一」は藤井(2001)にならい逆接を表す。「近づきたいー離れたたい」と記述した場合、「近づきたいが離れたたい」を意味する。
- 4 ヤマアラシのジレンマという言葉や概念を広く世間に広めたものとして、アニメ作品の「新世紀エヴァンゲリオン」の影響は無視できない。新世紀エヴァンゲリオンは、日本はおろか世界中を狂乱の渦に巻き込んだ20世紀末の名作アニメである。初回放送はテレビ東京系列で1995年から1996年にわたって放送されたが、その第参話「鳴らない、電話」の中で赤城リツコが「ヤマアラシのジレンマって知ってる?」と発言する。この言葉は(リアルタイムでいうと世界には広まっていないわけだから)日本中の視聴者を虜にしたはずだ。それを示す直接的な根拠がないのでここでは「はずだ」という表現に留めておくが、新世紀エヴァンゲリオン全体でいうと、本家のアニメから小説、漫画、アニメの画面を収録した書物に広がりついにセリフが書かれた台本集が発売されるなどして日本社会を爆発的に侵食していった。これはヤマアラシのジレンマという言葉が若者を中心として広まっていたことを間接的に示す証拠といえるかもしれない。ところで、この話では主人公に携帯電話が渡されるものの気軽に活用できない心の葛藤が描かれている。この回では主人公である碓シンジの暗く引きこもった性格(?)にフォーカスを当てているのだが、携帯電話

というコミュニケーションツールが世間に広まっていくなかで、並行して“他者と繋がる可能性”を携帯することができるという新世紀との付き合い方を模索する様を記録しているようであり、スマホ全盛期の今から見返しても興味深い回となっている。赤木リツコと葛城ミサトが電話で会話するシーンがあるが、そこでは携帯電話を指して「(シンジ君に)必須アイテムだからずいぶん前に携帯わたしたんだけどね」と話している。ところが当の本人たちは有線電話を使って会話しているのだ。高校生である主人公にとって必須アイテムであるならば、大人のリツコとミサトにとっても必須アイテムだと思うのだが、このシーンに限らず当時の携帯電話の扱いについて考えさせられることが多い。

- 5 ほかにコミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs(藤本・大坊, 2007)も併せて実施しているが、その結果については別稿で論じる。

Appendix

本稿は第2著者の令和3年度卒業論文である「きょうだい構成と山アラシ・ジレンマの関係」において収集されたデータを元にし、第1著者による分析方法の再構築、再分析、その結果を受けた再考察および全体的な加筆修正を経て作成された。

本稿についての問い合わせや連絡などはymatsuda@ishikawa-nu.ac.jp(第1著者宛)に連絡してください。

引用文献

- 藤井 恭子(2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 *教育心理学研究*, 49(2), 146-155.
- 藤本 学・大坊 郁夫(2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. *パーソナリティ研究*, 15(3), 347-361.
- 浜崎 信行・依田 明(1985). 出生順位と性格(2): 3人きょうだいの場合 *横浜国立大学教育紀要*,

25, 187-196.

- 堀 洋道・吉田 富二雄・宮本 聡介 (2011). 心理測定尺度集〈5〉個人から社会へ“自己・対人関係・価値観”サイエンス社.
- 金山 富貴子・笹山 郁生 (1997).「きょうだい型」ステレオタイプの検討 福岡教育大学紀要, 46, 209-220.
- 三木 安正・木村 幸子 (1954). 兄的性格と弟的性格 教育心理学研究, 2(2), 1-10, 53.
- 岡山県立図書館. レファレンス事例詳細 (Detail of reference example) [Internet]. レファレンス協同データベース, 2019年12月15日 (参照2022年9月8日). https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000270290
- 下山 啓・日本放送協会 (1986). 兄弟姉妹人間学：人間の性格は出生順位で決まる 徳間書店.
- 白佐 俊憲 (1993). きょうだい関係と性格 1. YG検査による検討 北海道女子短期大学研究紀要, 29, 1-16.
- 白佐 俊憲 (1995). きょうだい関係と性格：3. 文献による検討 北海道女子短期大学研究紀要, 31, 1-16.
- 山崎 善也. ヤマアラシのジレンマー善聞語録138 [Internet]. 京都府綾部市. 2021年8月16日 (参照2022年9月8日). <https://www.city.ayabe.lg.jp/koho/shise/shicho/column/138-08.html>
- 依田 明・深津 千賀子 (1963). 出生順位と性格 教育心理学研究, 11(4), 239-246, 256.
- 依田 明・飯嶋 一恵 (1981). 出生順位と性格 横浜国立大学教育紀要, 21, 117-127.

Sibling-patterns and porcupine dilemma —Relationship to conflict in psychological approach and avoidance—

Yukihisa MATSUDA, Moe HIRATA

Abstract

This study aimed to determine whether there is an association between sibling patterns and the porcupine dilemma. We examined the associations between birth order, gender and gender identity, and the number of siblings with the porcupine dilemma. The porcupine dilemma was quantified using the pattern scale of the porcupine dilemma. The results showed that women are more sensitive to psychological loneliness than hurt, and tend to feel a substantial dilemma by trying to avoid problems that they are aware of, as a priority. This tendency was similar for siblings of the same gender. Where there were three siblings, they tended to feel more sensitive to loneliness and experienced dilemmas to avoid such situations.

Keywords : sibling-patterns, porcupine dilemma, birth orders, sex differences

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1510